

# 「聖堂参事会員助手の話」における“philosophy”について

## An Aspect of Chaucer's “philosophy” in “The Canon's Yeoman's Tale”

本田崇洋

福島工業高等専門学校 一般教科

HONDA Takahiro

National Institute of Technology, Fukushima College, Department of General Education

(2022年9月5日受理)

In “The Canon's Yeoman's Tale”, compared with *Consolation*, we can find the relationship between master and pupil: Lady Philosophy teaches Boethius, and the fraud canon does the priest or yeoman. There is a clear difference in a master's attitude to teach pupils: in *Consolation*, Philosophy, discussing some complicated topics with him, explains every topic respectfully, slowly, and carefully, watching how much the pupil understands some topic, to get him to understand it perfectly. In CYT, however, the master's aim is for his pupil not to consider the mysterious art carefully; his explanation is rough, pressing, and speedy enough not to make him understand. The canon's philosophy makes a striking contrast to Boethius' one. Through the discussion with Philosophy, Boethius recovers his state of mind, dissolving his despair. Philosophy's discussion leads to his happiness. Meanwhile, the canon's philosophy, making gold, necessarily arouses people's desire, which can bring about people's soul's destruction. In CYT, reflecting a genuine aspect of “philosophy”, Chaucer mocks the false aspect of philosophy with irony.

**Key words:** Chaucer, “The Canon's Yeoman's Tale”, Boethius' *Consolation of Philosophy*, philosophy

### 1. はじめに

『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*)の後半に収録されている「聖堂参事会員助手の話」(“The Canon's Yeoman's Tale”)は、人を騙して金銭を巻き上げる錬金術の物語である<sup>1)</sup>。その物語で語られる「錬金術」という語は、ほとんどは、“alchemy”ではなく、“philosophy”と表現されている。*O. E. D.*によれば、中世時代には“philosophy”は、“(In early use) Magical or occult science; magic; alchemy”という意味で使用されている。<sup>2)</sup>一方で、*O. E. D.*によると“philosophy”の原義は、“(In the original and widest sense.) The love, study, or pursuit of wisdom, or of knowledge of things and their causes, whether theoretical or practical.”とされている。

チョーサーと“philosophy”の関連について、その一つには、ボエティウスの『哲学の慰め』(*De Consolatione Philosophiae*)が挙げられる。本論では初めに、『哲学の慰め』を通じて、“philosophy”はチョーサー作品を創作する上で不可欠な概念であること、また、その概念は、現世を生きる上での重要であったことを考察する。また、

「聖堂参事会員の助手の話」で使われる“philosophy”と『哲学の慰め』のそれとの類似点、相違点を考察したい。本論では、「聖堂参事会員の助手の話」におけるチョーサーの“philosophy”を論じる。

### 2. チョーサーの“philosophy”について

『哲学の慰め』の作者であるボエティウスは、東ゴート王テオドリクスに仕え、その後、執政官、元老院を歴任し、王の側近である長官として仕えていた。ボエティウスの廉直に、また厳格に政治を行うその姿勢は、周りの政治家たちの反感を買ってしまい、身に覚えのない反逆罪を着せられてしまう。ついには、パヴィアに幽閉され、死刑宣告を受けてしまう。全五巻で構成される『哲学の慰め』は、絶望の淵でもがき苦しむボエティウスが、自身の死を前にして書かれたものである。

『哲学の慰め』の冒頭において、ボエティウスは余りの絶望のために、感情的になってしまい、正しく思考することができなくなっていた。そこに気品のある身なりをした貴婦人「哲学」が現れる。真の幸福に関する様々な議題を通じ議論することで、ボエティウスの魂を天上

世界へ誘い、絶望から彼を救おうとする。ポエティウスは、この世界を正しく認識することを忘れていたが、「哲学」による議論、それは、世界を正しく認識し、真の幸福とは何か、善とは何か、また、繁栄、名声といった現世の幸福の無価値さを議論することで、正しい世界の認識を取り戻し始める。絶望と悲しみといった無益な「感情」は、魂を腐らせてしまうが、哲学という強靱な理性をもって、魂の腐敗は食い止められるのである。

そもそも「感情」とは、それ自体、一時的であり不安定な性質である。現世が常に流動的であり、特に、中世時代では、無常の世界と描かれるように、ある意味では、不安定な感情とは、不条理な現世に生きる人間の脆さを象徴している。「哲学」は、嵐のように激しく変わりゆく現世、またそこに生きる者が不安定な感情に囚われてしまっている状態でも、心が変わることなく、揺らぐことのない不変な理性である。つまり、「哲学」が象徴する理性は、無益な感情と対極に位置していると言えよう。

ポエティウスの人生は、中世時代には「悲劇」として扱われている<sup>3)</sup>。チャーサーが「修道士の話」(“The Monk’s Tale”)で語っているように、「悲劇」は、中世時代には、繁栄した状態から不幸な境遇に陥る、幸福から不幸へ没落するプロセスをもつ物語と説明されている<sup>4)</sup>。つまりは、ポエティウスの人生は、世俗的に繁栄した状態から、人間の悪意によって死に追いやられた没落した人生であり、「悲劇」なのである。

チャーサー自身もまた宮廷世界に身を置いており、様々な思惑と悪意、裏切り、暴走、一方的な権力の行使など、死に直結する緊張感のある環境で生きていた。ポエティウスの悲劇的な人生はチャーサーにとって関心のあるテーマであったと思われる。チャーサーは、『哲学の慰め』に由来する「運命の女神」の車輪をモチーフにしながら、物語の中で人生の浮き沈み、人間の幸福の状態から不幸な状態へ落ちる物語を多く創作している。チャーサーの作品においてその不幸な状態とは、ポエティウスの人生と同じように、多くは権力者によって殺される場合がほとんどである<sup>5)</sup>。同時に、突然に悲劇が訪れる人の世の中に、『哲学の慰め』における真の幸福の様々な議題、例えば、声、富、高貴さ、戦争、愛、自由意志、運命といったテーマを、チャーサーが自身の作品に反映させている。これは、自身の作品に、ポエティウスの悲劇的人生を想起していることを示している。

運命の不安定さに関して、チャーサーは、『哲学の慰め』の思想を元にした教訓風小詩である「ポエティアン・バラッド」を創作している。その元となるテーマは、『哲学

の慰め』の第二巻を中心に見ることができる<sup>6)</sup>。『哲学の慰め』の第二巻は、現世を憎むポエティウスの心境を回復させようとする第一段階の処置を行う場面である。そのとき「哲学」は、ポエティウスに、現世の真の姿、つまり、この世は常に不安定であり、移ろいやすい性質であることを教える。チャーサーの他の作品にも『哲学の慰め』の影響を随所に見ることができる。その影響の多くは、人間の不安定な運命を示す第二巻からの影響である。チャーサーにとって『哲学の慰め』の一つの関心事は、現実世界の不安定さ、人間の運命であったと言える。

チャーサーは自身の物語の中で『哲学の慰め』の思想に基づく無常の世界を描き、同時に、ポエティウスと「哲学」の真の幸福を求めたような難解な議題を、それぞれの物語の世界で、提示し、いわば議論を展開させる。チャーサーのこの態度は、まさに“philosophy”の原義にある“the pursuit of knowledge of things and their causes”にあると言えよう。

人間の裏切りにより、今まさに死の淵にいる極限の状態、真の幸福を議論する「哲学」こそ、絶望や恐怖を超えた、感情に囚われることのない、また恐怖や自棄に揺らぐことのない、強固で不変なものである。それは、チャーサーは精神的支柱と認識していたことを示すものである。不安定な、運命の大海に翻弄される現世を生きたチャーサーにとって、「哲学」との議論により示される“philosophy”は重要な概念であったと言えるであろう。

### 3. 「聖堂参事会員助手の話」における“philosophy”

「聖堂参事会員助手の話」は、教会参事会員とその助手が、カンタベリー大聖堂へ向かう一行に加わることから始まる。「聖堂参事会員助手の話」は二つのパートに分かれている。第一部では、助手は、苛立って悪態をつきながら、これまでの錬金術の失敗を語る。多くの実験を行ってきたが、一度も成功したことがない。一回の実験には多くの費用が必要となる。失敗が続き、資金は底をつき、ぼろぼろの服に身を包む程、貧乏となってしまう。失敗する度に、主人である聖堂参事会員、他の仲間たちは、その理由を考えるが、結局は、前向きな言葉を掛け合い、再度挑戦しようとする。助手は、利益は見込めないにも関わらず、この術に没頭する者たちに呆れ果てる。最後は、「金のように見えるものがすべて金とは限らない」(VIII. 962-3)、「おいしそうなりんごはすべて美味しいとは限らない」(VIII. 964-5)、「一番賢そうな人間が、実際に、一番愚か者であるかもしれない」(VIII. 967-8)、

「一番正直そうに見える人間が泥棒であるかもしれない」(VIII. 969)などと、「見た目と実体の違い」を指摘しながら、この偽りの術の愚かさを吐露する。

第二部は、別の聖堂参事会員の話である。ある寄進で暮らしを立てる司祭がいた。彼は小遣いを十分にもっていた。そこにある聖堂参事会員がその司祭に金を借りにきた。聖堂参事会員は約束の期日までに返済したため、この司祭は聖堂参事会員を信頼した。この聖堂参事会員は金を増やす秘術を司祭に教えた。聖堂参事会員は水銀を銀にする術を実践しようとした。最初から用意していた銀を気づかれぬように生成場所へ置くなどといった巧みないかさまを行い、三回とも水銀や銅から銀が生成されたように見せた。司祭はそれを信じ、秘術を教えてくれた謝礼を、要求されたままの金額四十ポンドを支払った。後から何度も試そうとしても上手くいかず、司祭はまんまと騙された。

「聖堂参事会員助手の話」での「錬金術」または「錬金術師」は以下のように表現されている。

that science (VIII. 680)  
 that art (VIII. 716)  
 his science (VIII. 721)  
 to multiplie (VIII. 731)  
 That slidyng science (VIII. 732)  
 elvysshe craft (VIII. 751)  
 This cursed craft (VIII. 830)  
 multiplie (VIII. 835)  
 philosophre (VIII. 837)  
 a maistrise (VIII. 1060)  
 a filosofre (VIII. 1122)  
 this philosophie (VIII. 1139)  
 this alkamystre (VIII. 1204)  
 this soory craft (VIII. 1349)  
 my philosophye (VIII. 1373)  
 Philosophres (VIII. 1394)  
 philosophres (VIII. 1427)  
 philosophres fader (VIII. 1434)  
 The philosophres (VIII. 1464)  
 the philosophres (VIII. 1473)

「錬金術」は、現代英語では“alchemy”が一般的である。A. E. D. によると、中世時代にもその語は使用されている。例えば、「聖堂参事会員助手の話」では、助手が「錬金術師」と語るときに、一度だけ“this alkamystre” (VIII.

1204)と表現している。「聖堂参事会員助手の話」で主に使用されている語は、“science”、“art”、“craft”であり、これには、“slidyng”、“elvysshe”、“cursed”、“soory”といったネガティブな形容詞を伴うことが多い。これらの語を使用している者は助手であり、聖堂参事会員ではないという点に注意したい。騙された側が紛い物の「哲学」を表現するのであれば、当然、そのような形容詞が必要となる。

それでは、聖堂参事会員が使う「錬金術」、「錬金術師」表現はどのように表現されているのであろうか。以下に示すものが、聖堂参事会員が使う「錬金術」に関する語である。

a maistrise (VIII. 1060)  
 a filosofre (VIII. 1122)  
 this philosophie (VIII. 1139)  
 my philosophye (VIII. 1373)

詐欺師である聖堂参事会員が使う言葉のほとんどは、“craft”や“science”ではなく、“philosophy”である。一般的な解釈とするならば、この“philosophy”の意味は、“magical or occult science; magic; alchemy”であろう。しかし、聖堂参事会員はこの意味で使用していないと考えるのが自然である。なぜなら、彼は詐欺師であり、偽りの「哲学者」であり、愚鈍な相手を騙すために、あえて、“philosophy”の原義である“A lover of wisdom; one who devotes himself to the search of fundamental truth”を利用していると考えられるからである<sup>7)</sup>。この詐欺師は意図的に“philosophy”を使用しているのである。詐欺師にとって、物事の表面だけ本物のように飾りつけ、相手を騙せれば良いのである。この言動は、助手が第一部の最後で述べた「金のように見えるものがすべて金とはかぎらない、おいしそうなりんごはすべて美味しいとはかぎらない」を象徴していると言えよう。

フラグメント VIII の 1388 行目以降後半、助手は最後に自分の話を総括するが、そこでは「錬金術師」は“philosophers”と表現されている。聖堂参事会員は自分自身を“philosopher”と語っていたときは、単数形であるが、一方で、助手の場合は、複数形で使用されている点に注意したい。単数形であれば一人、すなわち、詐欺師自身一人を示していることになる。助手の“philosophers”は、基本的には、ヴィラノーヴァのアルナルドス、ヘルメス・トリスメギストス、プラトンの

ど、名のある哲学者の後で使用されている。助手の“philosophers”は“magical or occult science”に従事する者の意味合いを含みながらも、どちらかと言えば、“The knowledge or study of nature, or of natural objects and phenomena”の研究者のニュアンスが強い。人を騙そうとする悪意、見栄、虚栄心などは含意されていないと考えるのが自然である。聖堂参事会員が意気揚々と主張する“philosopher”とは性質が異なるものである。

『哲学の慰め』では、ポエティウスは、現世の誤った認識から正しい理解へと変化する筋道を辿ったように、本来もつ意味への回帰と修正のモチーフを見ることがができる。助手が最後に締め括るときに使用する語“philosophers”は、聖堂参事会員が語る偽者の“philosopher”からの修正である。「聖堂参事会員助手の話」の『哲学の慰め』に見ることのできる一つのモチーフである。

#### 4. “philosophy”における「聖堂参事会員助手の話」と「哲学の慰め」との関係

「聖堂参事会員助手の話」は、『カンタベリー物語』の制作時期の後期に作られているという指摘がされている<sup>8)</sup>。また、ジョン・マッシュューズ・マンリーは、別の話として存在していた可能性を指摘している<sup>9)</sup>。言い換えれば、当初、チョーサーは、このいかさま錬金術の物語を収録するかどうかとも意図していたのかどうかは不明な状態であったということである。

「聖堂参事会員助手の話」で描かれるような錬金術は、すでに「ジェネラル・プロローグ」(“General Prologue”)で言及されている。チョーサーは、学生(“the Clerk”)を紹介するときに、“philosopher”を「錬金術師」として表現している<sup>10)</sup>。

For hym was levere have at his beddes heed  
Twenty bookes, clad in blak or reed,  
Of Aristotle and his philosophie  
Than robes riche, or fithele, or gay sautrie.  
But al be that he was a philosopre,  
Yet hadde he but litel gold in cofre;  
(I. 293-298 underline mine)

「彼は“philosopre”であったが、貴重品箱にはお金はほとんどなかった」という。この学生は貧しい身なりで、体も痩せこけている。「聖堂参事会員助手の話」では、錬

金術に従事する人間は、成功するはずもない術に金をつぎ込んでしまい、財産がほとんど残されていなかったが、この学生も錬金術に没頭していたことが暗示されている。学生の“philosopre”の描き方は、チョーサー特有の曖昧な表現となっている。学生のベッドにはアリストテレスと彼の哲学(“his philosophie”)に関する本が置いてある。この場合の“philosophy”は原義の方を示しているであろう。その文脈から、“he was a philosopre”と言われるのであれば、学生は純粹に“a lover of wisdom”であると解釈するのが自然である。しかし、学生は“philosopre”であったけれども、“cofre”(貴重品入れ、金庫)に金がない。つまり、それは、単に金がないというより、貯めておいた金がない、または、財産を失ったということを示している。金を一度でも貯めていたからこそ、学生は“cofre”を所持していたわけである。人を騙すかどうかは別として、この学生にも聖堂参事会員と同様に、「錬金術」にのめり込んでいたことが仄めかされている。

学生が話す物語は「グリセルダ物語」であり、錬金術の暴露話ではない。しかし、自身の錬金術の経験から、一つの可能性として、学生にいかさまの錬金術の話をするのができたはずである。しかしながら、偽りの錬金術の話は、聖堂参事会員助手に委ねられた。

「学生の話」には見られない点として、「聖堂参事会員助手の話」で語られる錬金術には、師弟関係という設定が行われていることである。助手は、聖堂参事会員が師であり、二人は師弟関係にある。また、物語の中で、司祭が錬金術を聖堂参事会員に教えるを請う時に、“I wol be youre in al that evere I may.”(VIII. 1248)と述べているように、聖堂参事会員と司祭も師弟関係にあることがわかる。一方で、『哲学の慰め』においても、ポエティウスと「哲学」もまた信頼の師弟関係であった。また、「聖堂参事会員助手の話」と『哲学の慰め』の背景には、“philosophy”を通じて、師弟関係が設定されている。

『哲学の慰め』では、絶望し迷う弟子に対して、師である「哲学」は適切な治療を施したことは先に述べた。「哲学」の治療は、絶望している相手に、真の幸福を理解させるために、順序立てて、理解と認識の段階をゆっくりと歩むものである。この点で重要なことは、弟子に教授するスピードである。「哲学」は相手の理解を配慮しながらゆっくり教える。いきなり、難解な話を持ちかけても混乱を助長するだけであり、丁寧さと思いやりをもって、師は弟子に丁寧にゆっくりと教えている。

師としての聖堂参事会員にこの点を見ることはできな

い。丁寧な考察を行わず、実験失敗の原因を明らかにしようとしな。い。「火が強すぎた」や「弱すぎた」など単純な推測をただけで、師は根拠なく、「次は大丈夫」と言い聞かせてまた挑戦する。『哲学の慰め』で行われるような、丁寧に、理性的に、物事を導く“philosophy”ではない。

さらに、いかさま師の聖堂参事会員の教え方には、以下に示すように、相手を急かさ言葉が多いのも特徴的である。

as faste (VIII. 1105)  
 anon (VIII. 1115)  
 anonright (VIII. 1141)  
 anon (VIII. 1142)  
 spedily (VIII. 1143)  
 anon (VIII. 1145)  
 faste (VIII. 1146)  
 bad hym hye (VIII. 1151)  
 as faste (VIII. 1235)  
 soone (VIII. 1289)  
 as swithe (VIII. 1294)  
 hy the (VIII. 1295)  
 as swithe (VIII. 1309)

騙すことが目的であるために、相手にできるだけ物事を理解させる時間を与えないのであろう。この「錬金術」は、金を欲しいという欲望を駆らせるために、弟子も落ち着いて真理を正しく見極めようとする気持ちはなく、師の言う通りに、言われるがままに従ってしまうのである。助手はいかさま師から教わった錬金術という学問を次のように述べる。

But that science is so fer us biforn,  
 We mowen nat, although we hadden it sworn,  
 It overtake, it slit away so faste.  
 (VIII. 680-2)

この錬金術は、掴みどころが無い、実体のないものである。「学問は遠く前方にあり、近づいて行っても、その学問は素早く逃げてしまう」という。『哲学の慰め』では相手を理解させることに意義のある“philosophy”に対し、「聖堂参事会員助手の話」では、真理を誤魔化すために相手を理解させない“philosophy”であることが分かる。本質的に『哲学の慰め』とは真逆の様相である。

「哲学」が魂を天上の世界へ導いた一方で、神に仕える立場にある聖堂参事会員は、人間を墮落させる所業を行う。『哲学の慰め』と「聖堂参事会員助手の話」の場合では、人間を至福の状態へ導くことも、没落させてしまうことも、その手段は“philosophy”であった。ここで注意したい点は、助手、またはチョーサーが非難の対象としているのは、“philosophy”を使って騙している聖職者であり、それに群がる者たちである。詐欺師に対するチョーサーの言葉は以下のように非難めいている。

He hath bitrayed folkes many tyme;  
 Of his falsnesse it dulleth me to ryme.  
 Evere whan that I speke of his falshede,  
 For shame of hym my chekes wexen rede.  
 (VIII. 1092-5)  
 It dulleth me whan that I of hym speke.  
 (VIII. 1172)  
 - the devel out of his skyn  
 Hym terve, I pray to God, for his falshede!  
 (VIII. 1273-4)

“philosophy”“といった「神聖」な学問を利用して、悪意のある罪を犯した者たちへの批判である。人を騙すことに関して、例えば、「粉屋の話」など、ファブリオに見られるような、巧妙な悪知恵を使って、世間的に嫌われている相手を痛快に騙し懲らしめたアブサロンとは事情が異なる。チョーサーはそのような騙しを非難することはない。

“philosopher”は、知を追求することが本質である。その追求は、「哲学」が行ったように、人間の幸福に結びつくことが一つの目的である。その“philosophy”を詐欺行為のために使用することは、チョーサーにとって、“philosophy”そのものを汚されたことへの失望である。チョーサーは無常の世界で生きる指針として本来あるべき“philosophy”が、詐欺師によって汚されたことへの怒りはもっていたらう。

チョーサーが作品の中で「怒り」を表現することは珍しい。何人かの研究者は、物語で語られた司祭のように、チョーサーは実際に「錬金術」で騙されたのではないかと指摘されている<sup>11)</sup>。この意見は、確証を得るまでに至っておらず、それは推測の域を出るものではない。ただ我々がどうしてもそのような推測をしたくなるのもまた事実である。それは、他の物語ではあまり見ることできないチョーサーの激しい非難を感じると、その怒りは個人的なものではないかと感じざるを得ないからである。

錬金術が与える幸福、または金を生み出したいという欲望は、単なる世俗的な幸福、地上の快樂にすぎない。財産を失い、騙され、破滅しても錬金術に従事する者たち、また、錬金術を用いて貪欲な人間を騙す詐欺師たちは、その行為に対して悔い改めることはない。貪欲な人間が、貪欲な人間を騙し続けるという、欲望と裏切りが永遠に繰り返される世界である。そのため、「聖堂参事会員助手の話」で描かれる世界には、後悔や救いが存在しない。ただ、欲望に忠実に、現世の幸福にだけ固執し、救いの光を見出そうとしない人間の世界である。

「救い」のない世界、言い換えれば、それは「地獄」である。牢獄の中でボエティウスが希望を失っていた状態ということは、ある意味では、彼は「地獄」にいたとも言える。「哲学」は、そのような絶望から、その果てに至福の天上の世界へと誘った。例えば、ダンテの『神曲』の「地獄」には、地獄で病気に苦しむ錬金術師も描かれている。その地獄の場所は、悪意に罪を犯した者が苦しむ場所である第八圏、その第十の濠である。強烈な悪臭が立ち上るその中で、疥癬に苦しむ錬金術師グリッフォリーノや、癩病に苦しむ錬金術で贖金をつくったカップキオがいる。一方で、チョーサーの錬金術の舞台背景は、錬金術がひっそり身を潜める住処は人目を避けた暗い場所であり、常に火が燃え立ち、硫黄臭い環境であった。失敗すれば爆発する危険な場所である。錬金術師の服装はぼろぼろに擦り切れており、顔は血の気がない、体臭もかなりひどい。今道友信は『神曲』は全編現世の中にあることの象徴的な物語のように見えてくる。」と述べている<sup>12)</sup>。チョーサーもこの物語、つまり、現実世界に、地獄を作り出している点は興味深い。「哲学」の身なりには気品が漂っていたが、もう一方の“philosopher”は悪臭を放つ貧しい身なりであった。『哲学の慰め』と「聖堂参事会員助手の話」では、“philosophy”を通して、天国と地獄との対照的な構図となっている。

## 5. 終わりに

「聖堂参事会員助手の話」の最後では、ヘルメス・トリスメギストス、ヴィラノーヴァのアルナルドス、プラトンといった哲学者でさえ、錬金術を説明するときには、“ignotum per ignocius” (VIII. 1457) (「分からないことを分からないことで説明する」) である。錬金術を学ぶ者にとっては、結局はこれら哲学者たちでさえも何も分からないままである。この“philosophy”は、怪しい学問であるものと同時に、人の欲望が絡むために、さらに危険なものとなる。

『哲学の慰め』における“philosophy”は、その議題が理解できるからこそ、認識、知覚、実感することで、魂は救われる、つまり、自身が幸福の状態へ至ることができるわけである。「哲学」は、ボエティウスに分かり易く教え、理解させることに徹底していた。ボエティウスが「哲学」を通して、物事を理解することができなかつたならば、自身の運命を不条理として、自身を呪い自滅していたであろう。物事が理解できないことは、不条理な運命へと導かれるわけである。言い換えれば、理解できないもの、不明なものは、それ自体に危険があるということ、悲運をもたらす危険なものである。「聖堂参事会員助手の話」において、不明な言葉を並べる「錬金術」という学問は、“to brynge folk to hir destruccioun” (VIII. 1387) というように死を招く、悲運をもたらすものである。チョーサーは、そのような“philosophy”に対する態度で最も良いことが、それに手を出さず、関わり合わるべきではないと助言する<sup>13)</sup>。本来の“philosophy”は知を愛し、追求すべきものである。偽物の“philosophy”は、本来の“philosophy”とは本質的に真逆となる。「聖堂参事会員助手の話」では、チョーサーは、聖職者が人を騙す「錬金術」を描く時に、自身にとって教典のような『哲学の慰め』のモチーフを皮肉的に反映させているのである。

## 注 釈

- 1) 本稿のチョーサーのテキストは Benson, L. D., ed. *The Riverside Chaucer*. 3<sup>rd</sup> edn. (Oxford: Oxford University Press, 2008) による。
- 2) 本稿による *O. E. D.* は第二版による。
- 3) Howard Rollin Patch, *The goddess Fortuna in Mediaeval Literature* (New York: Octagon Books, 1967) 67-70.
- 4) Tragedie is to seyn a certeyn storei,  
As olde bookes maken us memorie,  
Of hym that stood in greet prosperitee,  
And is yfallen out of heigh degree  
Into myserie, and endeth wrecchedly. (VII. 1973-7)
- 5) 『カンタベリー物語』に描かれる「殺人」について詳しくは「“The Monk’s Tale” の裏切りと殺人について -The Canterbury Tales の巡礼との関わり-」(OLIVA 19号、関東学院大学英米文学学会, 2013.) を参照。
- 6) *The Riverside Chaucer*, 1083-6.
- 7) *O. E. D.* “philosopher”
- 8) *The Riverside Chaucer*, 946.

- 9) John Matthews Manly, *Some New Light on Chaucer*. (New York: Henry Holt and Company, 1926), 246-7.
- 10) *The Riverside Chaucer*では“the word can mean either philosopher or alchemist”と解釈されている。(The Riverside Chaucer, 28.)
- 11) *The Riverside Chaucer*, 20.
- 12) 今道友信『ダンテ「神曲」講義』(みすず書房, 2004) 285.
- 13) Lat no man bisye hym this art for to seche,  
But if that he th' entencioun and speche  
Of philosophres understonde kan; (VIII.1442-4)  
I rede, as for the beste, lete it goon  
(VIII. 1475)
- 7) Correale, Robert M. ed. *Sources and Analogues of the Canterbury Tales*. Vol. 1-2. Woodbridge: D. S. Brewer, 2003.
- 8) Gray, Douglas, ed. *The Oxford Companion to Chaucer*. Oxford: Oxford University Press, 2003.
- 9) Crow, M. M. and Olson, C. C., eds. *Life-Records*. Oxford: Oxford University Press, 1966.
- 10) Jefferson, Bernard. *Chaucer and the Consolation of Philosophy of Boethius*. New York: Gordian Press, 1968.
- 11) Kelly, Henry Ansgar. *Tragedy and Comedy from Dante to Pseudo-Dante*. Berkeley: University of California Press, 1989.
- 12) ————. *Ideas and Forms of Tragedy from Aristotle to the Middle Ages*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- 13) ————. *Chaucerian Tragedy*. Rochester: D. S. Brewer, 1997.
- 14) Manly, John Matthews. *Some New Light on Chaucer*. New York: Henry Holt and Company, 1926.
- 15) Marenbon, John. *Boethius*. Oxford: Oxford University Press, 2003.
- 16) Minnis, A. J. *Chaucer's Boece and the Medieval Tradition of Boethius*. Cambridge: D. S. Brewer, 1993.
- 17) Minnis, A. J., Scattergood, V. J. and Smith, J. J. *The Shorter Poems*. Oxford: Clarendon Press, 1995.
- 18) Patch, Howard Rollin. *The Goddess Fortuna in Mediaeval Literature*. New York: Octagon Books, 1967.
- 19) 今道友信. 『ダンテ「神曲」講義』. みすず書房, 2004.

### 参考文献

- 1) Andres, Carmen Elizabeth. *Chaucer's Reading of Boethius in the First Fragment of "The Canterbury Tales"*. Ann Arbor: U. M. I., 1992.
- 2) Baldwin, Charles Sears. *Medieval Rhetoric and Poetic (to 1400), Interpreted from Representative Works*. New York: The Macmillan Company, 1928.
- 3) Benson, L. D., ed. *The Riverside Chaucer*. 3<sup>rd</sup> edn. Oxford: Oxford University Press, 2008.
- 4) Burnley, J. D. *Chaucer's Language and the Philosophers Tradition*. Cambridge: Ds Brewer, 1979.
- 5) Bruhn, Mark J. “Art, Anxiety, and Alchemy in the ‘Canon’s Yeoman’s Tale’ ”. *The Chaucer Review*, Vol. 33 (3), 1999, p. 288-315.
- 6) Campbell, Jackson J. “The Canon’s Yeoman as Imperfect Paradigm.” *The Chaucer Review*, Vol. 17 (2), 1982, p. 171-181.